

教育議論におけるNHK『中学生日記』の役割

－制作者側・視聴者側の語りを中心に－

王 令薇

1. はじめに

1.1 研究背景と問題意識

高度経済成長期後の教育改革に多大な影響を与えた「ゆとり教育」の理念は、1970年代に日本教職員組合（以下、日教組）で提起され、1990年代後半に評価のピークに達し、2000年代後半において最終的に学習指導要領から消え去った。これまで教育学の研究において教育改革の諸制度の功罪は多く検討されてきた。しかし、「ゆとり教育」を方向とする教育改革がなぜ、どのように1990年代に「国民的な合意」と見なされるようになったのかというプロセスを、考察する研究はまだ少ないのが現状である。本研究はこうした問題意識を背景にしている。

教育社会学の研究では、「ゆとりのある教育」という高度成長期後の教育改革の考えを裏付けた社会的合意を批判する研究が多く見られる。例えば、広田照幸は「個性に応じた教育」などの教育改革の方針を「思考停止させる機能を持つ言葉」として捉えている¹。荻谷剛彦は、臨時教育審議会以後、「ゆとり教育」などの教育改革が前提としてきた「国民的な合意」が実体を伴ったものではなく、「個人的な印象や体験に基づく主張」にほかならないと指摘している²。だが、上述した研究の関心は教育議論の「内容」に留まっている。1970年代以降の40年間に於いて人々が教育問題をめぐる議論にどのように参加したかといった、議論の「形式」に関連する問題に注目する研究はほとんど見当たらない。

また、教育改革をめぐる議論形成のメカニズムに注目する先行研究としては、荻谷剛彦の『追いついた近代 消えた近代』がある。荻谷は、1980年代半ばの臨時教育審議会（以下、臨教審）を一つの転換点と捉え、経済成長および産業化の達成によるキャッチアップ型近代の終焉が政界や教育界を中心とする教育議論にもたらした変化を、政策文書や知識人・研究者の言説から明らかにした³。ただし、政策決定に直接関わるエリートだけでなく、一般大衆が教育問題をどのように認識し、語ってきたのかを整理する必要がある。

そのため、日本放送協会（NHK）の『中学生日記』という番組をめぐり、親、教育関係者と放送関係者等のアクターの語りを手がかりに、上記の先行研究で残された問題について考察を試みる。すなわち、本稿の目的は、高度経済成長期後の教育議論における『中学生日記』の役割を考察するとともに、「ゆとり教育」が「国民的な合意」と見なされていくプロセスの一端を明らかにすることである。

1.2 NHK『中学生日記』について

『中学生日記』は、1972年から2012年にかけて毎週放送されたNHK名古屋放送局制作の社会教育番組である。公立中学校を舞台に、生徒役の出演者はすべて素人の現役中学生であるという「リアルな中学生の日常」⁴を特徴とし、時代ごとの中学生の思春期の悩みを描きながら、アクチュアルな教育問題を鋭く追及していた。

番組の形式は、ドラマでありつつ、「一種のドキュメンタリードラマ」⁵とも呼ばれる。それは、「普通の身近な人」⁶が主人公として登場し、学校や家での些細な出来事が描き出されたからである。その上、これらの出来事は、ポピュラーニュースの在り方を論じるフィスクの言葉借りれば、「客観的真理」でなく進行形で未確定の物語として提示されていた⁷。

これまで、戦後の教育史研究やテレビ研究におけるNHK『中学生日記』関連資料の価値はしばしば言及された⁸。しかし、管見の限り、それらの資料を直接的に扱い、『中学生日記』について分析する研究は存在しない。その理由は主に2つあると考えられる。

第一に、視聴率がそれほど高くなかったからである。大衆文化の一部であるテレビ番組の研究の中で、世間の注目を集める話題作、例えば、クイズ番組やポスト・トレンドドラマ、学園ドラマ等は対象とされがちである⁹。しかしながら、NHKアーカイブズの開始とともにドキュメンタリーや福祉番組などの教育・教養番組を対象とし、その内容を記号論的に分析・検証する動きが広まっている。その背景としては、放送当時全国的にヒットしなかったとしても、その番組を熱心に視聴した一部の人に与えた影響はなかったわけではない、または人間の構成した「現実」はテレビ番組から分析できるといった考えが挙げられる¹⁰。

第二に、長寿番組に対する把握の難しさがあるからである。『中学生日記』とそれをめぐる言説空間は、メディア環境や教育現場の変化とともに変わっているものだと考えられる。一方で、長寿番組であるからこそ、それをめぐる教育議論の変化を追うことができる。40年間にわたって長く放送されていたという点は、本研究を可能にする一つのメリットになるだろう。

『中学生日記』及びそれをめぐる言説は、「ゆとり教育」の理念が「国民的な合意」と見なされていく過程及び、その過程におけるメディアの役割を探るための重要な切り口になると考えられる。理由は次のようになる。まず、『中学生日記』は、ブラックボックスのような「リアルな中学生の日常」を一般大衆の前に露呈させることで、彼らの教育問題の見方にも影響を及ぼしていると言える。また、1972年度から2011年度という当該番組の放送時期は、理念としての「ゆとり教育」の誕生から終焉までの時期とほぼ重なる。更に、「日本の中学生たちの現実の縮図」¹¹を数十年にわたって描き続け、かつ日本国内で広範囲な議論を引き起こしたメディアは、『中学生日記』のほかにはないだろう。したがって、当該番組をめぐる多様な語り（特に親や教師、番組制作者側の語り）は、教育議論の形成プロセスを解明する上で見過ごしてはいけない対象なのである。

1.3 研究の方法

研究方法は、プロデューサーやディレクター、脚本家、先生役の出演者などの制作者側が書いた記事と出版物、そして新聞や雑誌に掲載された視聴者側の感想や意見を収集し、それらに

王：教育議論における NHK『中学生日記』の役割

対する時系列的な整理と分析を行う。資料を集める際に、グーグルスカラー、グーグルブック、国会会議録検索システム、国立国会図書館オンライン、朝日新聞記事データベース、読売新聞記事データベースと毎日新聞記事データベースの検索機能を利用している。具体的に、それぞれのデータベースで1972年4月以降を条件とし、「中学生日記」をキーワードに行った。更に集めたデータから、当該番組と直接の関係がない記事を取り除いた。このほか、番組終了時に電子掲示板（スラド、<https://srad.jp/>）に寄せられた視聴者からのコメント、『中学生日記』がペスタロッチー教育賞と国際エミー賞を受賞する際の選評と、NHK放送文化研究所が実施した「中学生・高校生の生活と意識調査」も参考にする。収集した資料の状況は表1に示す。以上の手法により、活字化された当時の語りは網羅できたと言えよう。

表1 資料状況

資料カテゴリー	資料名	件数
書籍（制作者の回想録等）	/	7件
国会会議録	/	19件
新聞記事	『朝日新聞』	215件 ¹²
	『読売新聞』	228件 ¹³
	『毎日新聞』	163件
一般雑誌記事	『放送教育』	11件
	『グラフNHK』	8件
	『社会教育』	3件
	『NHK年鑑』（番組広報）	41件（1972～2012年刊行分）
	その他	26件
学術雑誌記事	『放送研究と調査』	3件
	その他（『学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻研究年報』『児童文学論叢』『文化科学研究』『教育社会学研究』）	4件
ネット記事	NHK アーカイブス・番組エピソード、スラド（ https://srad.jp/ ）、ペスタロッチー教育賞受賞、国際エミー賞受賞	7件

『中学生日記』の役割を分析する際には、直接的・即効的なものとして捉える強力効果論の観点ではなく、制作者側と視聴者側の語りをもとに、教育改革をめぐる社会的合意の形成に対する当該番組の間接的・長期的な効果を多角的に描こうとするメディア史的手法を採用する。また、制作者側・視聴者側の語りのみを扱い、番組内容の分析は稿を改めて論じていきたい。なぜなら、教育議論の内容よりも、メディアがその議論において果たした効果に、本研究の関心があるからである。その目的を達成する上で、送り手がどのような目的で発信を行い、また受け手がそのメッセージをどのように解釈したかに対する歴史的考察は、番組の内容分析と比

べて有効性が高いと言えよう。

本稿の構成は以下の通りである。第2、3、4章では、制作者側の意識変容をもとに時代を3つに分け、彼らが『中学生日記』に寄せた期待と、視聴者側の受け止め方について、収集した語りを資料に考察する。最終章では、「ゆとり教育」の理念が「国民的な合意」と見なされていくプロセスにおける『中学生日記』の役割について、本稿の知見を総括したい。

2. 受験競争と選別教育の問題提起（1970年代～1980年代半ば）

本章では、『中学生日記』が放送されはじめた1970年代から1980年代半ばの臨教審による改革までの時期を扱う。第1節では、制作者側はどのような教育観を持ち、それをどのように当該番組に反映させるようとしたのかを考察する。第2節では、当該番組の視聴状況及び視聴者の意見を分析し、『中学生日記』の議題設定（アジェンダセッティング）の効果について論じる¹⁴。

2.1 教育の現状を考えさせようという意図

中学生、その保護者と教師に、中学生を取り巻く状況を考えさせることが『中学生日記』の目的とされている。プロデューサー・高島秀之は、「教育現場を安易に考えないように、番組でもドラマチックだったり妥協的な問題解決をしない」、また「教育問題を大きな社会問題ととらえ」と述べ、それらを当該番組の特色と捉えている¹⁵。プロデューサー・三浦三生も、起承転結の書かれたものではなく、大団円のない型のものとして『中学生日記』を作ろうとしたと述べた¹⁶。当時の制作者側は教育問題を視聴者に提起する役割、つまり、議題設定効果を『中学生日記』に期待していたことが分かる。

では、彼らはどのような教育問題を重要視していたのか。典型例としては、1973年度から1979年度まで『中学生日記』の制作に携わり、1978年放送記念日にNHK特別賞を受賞した¹⁷プロデューサー・八重樫克羅の語りを挙げよう。

『世界』に寄せた文章で、八重樫は「少年時代の成績が人生を決定するという考え方」を強く批判し、「そこで落伍した少年」に同情を寄せた¹⁸。その後1979年新年の「中学生日記・OB座談会」で、「現在の教育状況は、完全に社会のシステムと表裏一体をなしているわけですね。階級差は歴然とし、機構は強者のための論理で築かれている。子供社会は大人社会を投影し、全体の社会の雛型としてある。そのことを番組を通じて考えてきたつもりでした」と述べ、教育の現状及び社会格差への認識を示している¹⁹。

八重樫と似通った問題意識は他のプロデューサーと脚本家の言説からも読み取れる。とりわけ強いのは高校受験への関心である。脚本家・佐藤竜太と有高扶桑は、関連出版物のあとがきで「彼・彼女らの明かるべき毎日は、重苦しい受験の翳におおわれはじめた」と中学三年生の日常を捉えている²⁰。高島は「学校そのものが、管理社会のミニチュアとなりつつあり、偏差値、内申という強者の論理による尺度ですべてが測られることによる」と述べ²¹、三浦も「成績と内申だけがものを言う世界に変わってしまい、成績順に並べて行き先が決められてしまう」という現状を批判している²²。

上記のような制作者側の教育問題への認識は、当時の日本社会においてどう位置づけられるのか。荻谷剛彦によると、学歴社会の否定的な側面を強調し、受験教育を悪しき教育として見なす「学歴社会論」は 1970 年代から目立ち始めた²³。また、学力による序列化を「能力主義」と見なし、そのような教育を「差別教育」として批判する「差別選別教育論」は、日教組の全国教研集会において 1950 年代を通じてその原型が作られ、1960 年代半ばに「能力主義の徹底に対抗する理念」として形成された見方である²⁴。すなわち、当時『中学生日記』の制作者側が持つ観念は、教員などの学校関係者に既に受け入れられていたものでもあった。制作者側は、こうした学校関係者の問題関心を、『中学生日記』を通じて社会全体に提起しようとしていたと言える。

本節の最後に、『中学生日記』の視聴状況への考察の導入部としては、番組内の学級担任である風間先生役の出演者・湯浅実の下記の語りを挙げよう。

「中学生日記」を教材にして考える会、話し合う会が全国的な規模で広がっている。……かつて七年前（筆者注：1975 年頃）「中学生日記」に風間が赴任した時には、全国平均二・八％の視聴率だった番組が、今や十二％にも達するのだから、教育に対する関心の深さが知られる。……「中学生日記」は昔はマニアの見る番組であったのだが、現在は立派な、そして大衆的市民権を得てしまったのである²⁵。

この語りによれば、1970 年代半ばから 1980 年代までは、『中学生日記』がより広範な層から注目を受けるようになった。その背景には何があったのか。1970 年代から 1980 年代半ばにかけて、『中学生日記』はどのように見られていたのか。次節で探してみたい。

2.2 議題設定の効果

『中学生日記』は日曜日午後 1 時頃から 30 分程度 NHK 総合テレビで放送されていた。視聴方式は、1981 年に NHK 放送文化研究所が出している調査ノートによると、家庭での視聴が主であり、子どもは母親と、場合によっては父親と一緒に見るのが一般的である。加えて、『中学生日記』を録画し、教室で中学生に視聴させている学校は 1100 校以上あるとされている²⁶。上記のことから、母親と学校関係者による当該番組への支持が窺える。

放送利用社会教育事業を背景に、視聴者の間、そして制作者側と視聴者側とのコミュニケーションは活発であった。『NHK 年鑑』の番組紹介において、母親と教師を中心とした「中学生日記を見て語る会」などの放送利用グループの活動が 1977 年度から 1987 年度まで言及されていた。読売新聞の「放送塔」というコラムには、『中学生日記』に関する投稿が 1972 年から 1989 年まで見られ（計 55 通）、一部の意見に対する NHK 中部本部制作部の応答も確認できる²⁷。更に、1976 年『グラフ NHK』での紹介記事によれば、制作部への視聴者からの投書は月 200 通ほど寄せられ、中学生をもつ母親からや、悩んでいる中学生からの投書もあるという²⁸。

収集した「放送塔」投書の内容を見れば、『中学生日記』を通じて高校受験の重苦しさに共感し、学歴社会と選別教育の問題を考える視聴者は多いことがわかる。例としては、「知識だけが勉強ではないという先生の言葉が、受験生の前ではいかに無力かということを知らせれ、大い

に参考になりました」(教員)「なぜライバル意識を持つか?なぜ高校へいくのか?」(中学生)「なぜ高校へ進学するのか、内申書とは何か」(高校生)「教育制度に疑問を感じずにはいられなかった」(高校生)「学問がすべてではない」(農業)「受験を控え勉強と部活動の板ばさみに揺れる男子生徒の心をよくとらえていた」(主婦)といった内容が挙げられる²⁹。こうした投書の内容は、受験競争や選別教育を考えさせるという制作意図の実現を裏付けるものとして考えられる。

その上、視聴者は多様な視点から『中学生日記』を捉えていたことも確認できる。例えば、番組内の教師の「学年会にも出席せず生徒のところにいる」という行動に不満を示す投書は見られ、それと対照的に、その教師の姿に感動した視聴者も存在する³⁰。更に、親が教師に期待をかけ過ぎることが問題視された。評論家・新藤謙は、学園ドラマを「現実には、教師に受験教育を望んでいるという矛盾がある。その辺のところの突っ込みは足りない」と批判する一方で、「スターシステムを採らない『中学生日記』は、教師を特別、引き立たせるようなことをしない」と評している³¹。即ち、『中学生日記』を通じて、教育問題に対する多様な意見交換が存在すると推測される。

ただ、『中学生日記』のみによって人々が教育問題に関心を示すようになったわけではない。1970年代後半、中学生・中学校の「リアル」を描く当該番組が注目されるようになった背景には、いわゆる「学校内部への視線の勝利」³²、つまり新聞における少年非行報道の増加と、TBS『3年B組金八先生』等の学園ドラマの花盛りがある。以上のことから、『中学生日記』は、当時学校教育を問題として提起した数多くのメディアの一つとして捉えるべきだと考えられる。これらのメディアは、教育制度のあり方に関わる問題を提起し、その後の教育改革をめぐる議論の土台を作るという、議題設定の役割を果たしたと言える。

3. 「個性重視の原則」における合意（1980年代半ば～2002年度）

本章では、1980年代半ばから1990年代までの時期を扱う。第1節では、青少年問題の社会問題化と、教育改革のための臨教審の設立を背景に、制作者側の狙いはどう変化したのかを考察する。第2節では、視聴者の読み方を分析した上で、1980年代半ば以降『中学生日記』の役割変容について検討したい。語りへの分析を行う前に、背景を押さえておきたい。

1980年代、中学校における「校内暴力」が社会問題に捉えられはじめ、「荒れる中学生」という言葉も新聞に登場した³³。1980年代半ばにそのブームは下火になりはじめたが、「教育現場は荒廃が進んでいる」³⁴といったイメージは恐らく人々の印象に強く残った。その上、1985年から「いじめ自殺」の問題、1990年代になると「不登校」の問題が報じられるようになり、中学生の問題行動が日常化しているという認識は完全に定着したと言っても過言ではない。

青少年教育に対する関心の高まりの中で、教育改革を訴えた中曽根内閣によって1984年8月に臨教審が設立された。学校教育と家庭教育に関する世論調査は頻繁に行われていた。「非行問題に関して、親は学校が良くないと言い、教師は家庭が原因だと言う」³⁵という傾向があり、親も教師も双方が子育ての責任を問われた。学校教育に関しては、教師への信頼が下がり、「道徳教育の重視」の気運が高まる傾向が見られた。同時に、「詰め込み教育」と選別教育への批判

は共通認識として形成された³⁶。その一方で、家庭教育がより一層重視されるようになり、政府から「教育の重要な担い手である家庭の教育力の回復」³⁷への期待が示されるに至った。

臨教審は、1985年の第1次答申で「個性重視の原則」を提示し、その原則を「今次教育改革の主要な原則であり、教育の内容、方法、制度、制作など教育の全分野がこの原則に照らして、抜本的に見直されなければならない」と位置づけ、1987年の最終答申で再び「個性重視の原則」を確立することの重要性を強調した³⁸。

3.1 「個性重視」への強調と、「家庭」への注目

では、『中学生日記』の制作者側の狙いは変化したのか。具体的にどのように変わったのか。

1980年代後半になると、彼らの狙いは問題提起から「プラスのかたちのメッセージを出す」³⁹こと、言い換えれば、問題解決の過程もある程度提示することになった。その変化について、プロデューサー・野元元士は「どんなに悪い子でも、いつかきっと立ち直る。番組終了後の1分間、それが見えるようにしたい」と提示している⁴⁰。また、『NHK年鑑』（1985年刊行）に掲載された「問題行動ばかりでなく、中学生が本来持っている健康的な面、やさしさをもテーマに放送」という紹介文も、制作者側の意図の変化を裏づけるものであろう。

更に、中学生の個性への重視を『中学生日記』の制作方針として強調したことも浮かび上がる。ディレクター・大久保晋作がオーディションの審査基準について、「頭のよしあし、成績のよしあしも、いっさい関係ありませんし、もちろん外見のよしあしも大して判断基準にはなりません。……その子らしい個性が見えるかどうか、その子の人間らしさが見えるかどうかが一番大事な判断基準なのです」と述べている⁴¹。青少年問題をめぐる議論において、大久保は常に中学生の「個性」と「夢」のなさに焦点を絞った。同時代の制作者の言説を見ても、中学生は「自分の将来を見限るという心情」⁴²を抱き、「何かに向かって一生懸命になることが少ない」⁴³との認識が大半であった。

加えて、中学生の個性のなさの原因は、教育制度よりも中学生の親に求められたことが窺える。大久保は自らの著書『何かへんだぞ、中学生』の中で、「親の生き方が変わらない限り、子供たちは幸福にはなれません」「親自身が自分の生き方を問う、という姿勢があるべきだ」と断言したのである⁴⁴。『放送教育』に掲載された紹介文にも、「子育ての手抜き、過度の学校への期待や責任転嫁」⁴⁵といった中学生の親への露骨な批判が書かれた。

即ち、『中学生日記』の制作者側は、基本的に当時の教育改革の方向性を支持する立場に立って番組を作っていたことがわかる。彼らは、教育問題の責任が「公教育」のみならず、個々の「家庭」にもあると認識し、かつ主張していた。

3.2 「個性重視」を当然視する教育議論

視聴状況については、家庭での視聴が依然として主要な方式でありつづけた。また、放送利用学習事業の衰退とともに、「中学生日記を見て語る会」といった放送利用グループの活動に関する記述は1988年以降、『NHK年鑑』の番組広報文から消えた。前節で述べたとおり、制作者側の狙いは、個性重視原則と家庭の教育責任への強調に変わった。では、視聴者側の議論はどうなったのか。

『中学生日記』に対する社会的評価の高さがまず確認できる。特に1990年代に入ると、当該番組はモービル児童文化賞（1992）、厚生省児童福祉文化賞（1995）、「日本賞」教育コンテンツ国際コンクール前田賞（1995）、ペスタロッチー教育賞（1996）など、数々の青少年教育関係の賞を獲得した。受賞理由としては、「常に初々しさを失わず、生きた子供の課題に取り組んできた」⁴⁶ことが挙げられた。とりわけ『中学生日記』の歴史は、混迷する学校や家庭の教育再生を訴える「社会改革の闘い」⁴⁷としても評価された。

また、「放送塔」投書及び『放送教育』に掲載された視聴者投書によれば、『中学生日記』内の「子どもたちと先生方の現代的な悩みに同情」（職業不明）し、番組に「すばらしい感動を覚えたり」（職業不明）する⁴⁸、または「反抗し成長する子に涙ぐむ」（主婦）⁴⁹という視聴者は存在する。以上の選評と投書により、『中学生日記』の制作者側と視聴者側は当時、青少年の健全な成長のために教育環境を変えなければならないとの見解を共有していたことが分かる。

視聴者投書で取り上げられたテーマについて、1985年以降、受験への言及は少なくなり、それに対し、親の別居・離婚や、家族の悩みに関する内容は増えた⁵⁰。それは、教育問題の責任が親にもあるという制作者側の認識が、番組の内容構成に反映されたからであると推測される。

「家庭」が槍玉に挙げられるようになったとはいえ、視聴者として、特に母親の存在が確認できた。保護者と教職員によるPTAの会員に対して実施された「テレビ番組についてのアンケート調査」によると、『中学生日記』は「子供に見せたい番組」ランキングのトップ5に入っていた⁵¹。では、この時期において母親が番組をいかに見ていたのか。下記のノンフィクション作家・久田恵の語りは代表的であろう。彼女は、思春期の息子の心情や葛藤を理解するために番組を見始め、息子が中学校を卒業してからも見続けた一人であった。

このドラマは、学校側の視点で描かれているので、熱心な教師と、しょうもない親と問題を抱えた生徒という構図の話が多い。（内申点に関するエピソードの紹介）……教師はなぜそういうことを悩んだりしないのか。そここのところがどうにも理解できない私は、「中学生日記」を見る度に、子どもたちがもっと面白く生きられる場に学校を変えてくれ、ドラマでも母親だけを悪者にしないでそここのところをも鋭く突いて欲しい、と叫びたくなるのである⁵²。

即ち、思春期の子供の本音を探ることは、母親が当該番組を見続ける主な理由であるが、やはり見るたびに「母親だけを悪者」にすることに不満を抱くようになる。3.1で論じたように、制作者側は、「学校」や「教師」の問題よりも「家庭」の問題に関心を寄せていた。しかし、その「偏り」を問題視し、中学生の教育問題に対する「学校」と「教師」の責任を強調する親も少なくなかったことが、久田の文章から読み取れる。

本章の議論をまとめると次のようになる。1980年代半ば以降、「個性重視の原則」という教育改革の主張が臨教審により訴えられ、『中学生日記』の制作者側は、大枠でその原則を支持する立場に立っていた。また、視聴者側の言説を調べたところ、教育改革の必要性に異議を示したり体制の問題を指摘したりする語りはほとんど見られない。彼らの関心は、むしろ教育問題の責任がどの主体にあるかという問題に向けられるようになった。更に、『中学生日記』の社会的評価の高さと併せて考えると、当時、教育改革の必要性和「個性重視の原則」は、『中学生日

記』の制作者側・視聴者側に当然視されていたことがわかる。即ち、『中学生日記』は、教育制度の問題を社会に提起するメディアから、これらの制度の問題へのより一層深い思考を停止させるメディアに変わってしまったのである。

4. 「中学生の、中学生による、中学生のための番組」へ（2003 年度以降）

本章では、2003 年度以降の『中学生日記』をめぐる語りを扱う。2003 年度、『中学生日記』には大幅なリニューアルが行われ、とりわけ制作者側が番組のターゲットを親世代よりも中学生などの若い世代に絞った。こうして『中学生日記』は、中学生の日常生活を学校の外側に露呈させ、大衆の教育議論に生な素材を提供するという、これまで果たしてきた使命をいったん終えていたと言ってもよい。だが、方向転換の理由は何なのか。2003 年以降、『中学生日記』はどのようなメディアとして認識されるようになったのか。更に、2012 年に幕を閉じた理由はいかなるものであったのか。以下ではこうした問題をもとに論じていきたい。

4.1 「ぶつからない親子関係」「楽しい学校」

方針変更を意図した背景には、NHK 中学生・高校生の生活と意識調査が指摘するような「ぶつからない親子関係」「抑圧する学校から楽しい学校へ」⁵³という中学生を取り巻く環境に対する認識の変化があると考えられる。同調査によれば、中学生は不安定な心理状態やストレスの症状を持つことは少なくなり、穏やかになっている⁵⁴。その代わりに、中学生の勉強離れや学力低下が問題として注目され始めた。つまり、中学生の問題は受験競争の問題であり、家庭教育の問題であるという、これまで『中学生日記』の制作者側が準拠してきた認識枠組みが成り立ちにくくなったことは間違いない。

認識だけでなく、制度上の変化を見ると、中学生を取り巻く中学校の現実も確かに変わった。そのきっかけは、2002 年度のいわゆる「ゆとり教育」の本格導入である。具体的に、完全週 5 日制と総合的な学習の時間の導入、学習内容の 3 割削減が行われた。これらの政策の実行と中学生を取り巻く状況が良くなっているという認識の現れは、これまで個々生徒の個性を生かす、ゆとりのある学校教育の実現と、家庭の教育責任の回復を訴え続けた『中学生日記』の制作にも大きな影響を及ぼしたと推測できる。

ただし、『中学生日記』はその時点で終わらせず、中学生向けの番組として扱われ始めた。当時、青少年と放送との関係が注目され⁵⁵、とりわけ「青少年の健全育成のための番組を充実させる」⁵⁶という要請が強まっていた。その上、NHK 教育テレビ 2003 年度の「番組編集計画」では、「子どもに親しまれ、暮らしに役立つ波」という新たな柱が立てられ、その 1 つの施策として「少年・少女ゾーン」は午後 6 時から 8 時まで拡大された⁵⁷。NHK 教育テレビのゾーン編成が進められている中で、これまでの役割を終えていた『中学生日記』は「青少年の健全育成のための番組」として土曜日の「少年・少女ゾーン」に移された。

2003 年度から『中学生日記』の変化は激しく、アニメオタク、中二病、メル友と性暴力などの新しいテーマをめぐる検討が始まり、スタイリッシュな映像と音楽などの斬新な手法が扱われ始めた⁵⁸。これまでの予定調和的、教育的、道徳的なストーリーにとらわれず、「中学生にみ

てもらえる番組」を作りたいという制作者側の意欲があったという⁵⁹。更に、中学生の主体的な参加がより一層求められた。出演だけでなく、主題歌やシナリオ、全国ネットワークによる特別企画の制作、ドラマ撮影、「体験談」への生放送投票、会員募集「中学生日記サポーターズ」といったイベントが企画されるようになった。

リニューアルとともに、『中学生日記』を熱心に見続けてきた親や教師などの「大人」がだんだん減っていくことは制作者にも想像できたであろう。視聴者モニターには、「内容がわかりにくい」「ついていけない」「演出がふざけすぎ」といった中高年者の意見が多数寄せられた。こうした意見に対し、制作者側は「すべての層に受け入れられるものは作れない」と強調した⁶⁰。

要するに、「ゆとり教育」の実施及び青少年問題の沈静化を背景に、「中学生の日常」に対する社会認識が変化してゆき、「ゆとり教育」を方向とする改革が必要だという社会的合意も次第に崩れていった。こうした中で、制作者側は『中学生日記』を「青少年の健全育成のための番組」として扱うようになり、中学生にアピールしようとしていた。

4.2 長寿番組の終焉

『中学生日記』への人々の視線は確かに変化した。とりわけ当該番組の青少年の健全育成への積極的な効果には、教育関係者・放送関係者等が期待をかけていた。例えば、2003年度のリニューアルについて、発達心理学教授・無藤隆は、「中学生は大人に比べると純粋。日常生活では、しらけているように見えても、感覚の合うタレントや役者の言うことはまじめに聞く。その点でテレビの影響は大きい」⁶¹と述べた。また、国際エミー賞子どもシリーズドラマ部門で「僕と君のメロディ」という『中学生日記』の一つのエピソードが最優秀賞に選ばれた⁶²。その受賞は、放送関係者の間における『中学生日記』の評判の良さを裏付けるものとも言える。

しかし、2012年1月18日、NHK名古屋放送局から同年3月16日での番組終了が正式に発表され、『中学生日記』は最終回「命」（第1501回）をもって終了した。その理由について、プロデューサー・滝沢昌弘（2012）は「教育テレビに移って中学生世代に見てもらうことが番組の一つの使命になったが、各種の調査で果たせなくなった」と述べ、若者の関心の低迷を認めた⁶³。後継番組は、同じ名古屋放送局が制作を担当する『ティーンズプロジェクト フレ☆フレ』という少年少女の夢への支援を目的とする視聴者参加ドキュメント番組になったが、2014年3月に早くも終了に追い込まれた。

当時の若者は『中学生日記』の終焉をどう捉えたのか。スラドという電子掲示板での内容を参考にすれば、「中学生がターゲットだったとは信じ難い」という意見は、多くのユーザーに支持されたことが窺える。このほか、「年寄りたちの青春回帰の番組だったのではないか」「中学生日記は先生から見た中学生または理想の中学生像だったのかもしれない」⁶⁴といったコメントも確認でき、当時『中学生日記』は大人向けの番組として見なされたことが分かる。

要するに、制作者側は『中学生日記』を青少年に好まれる番組に変身させようとしているが、その目的が確実に達成されたとは言い難い。更に、その方針転換とともに、親や教師などの大人の視聴者が次第に番組から離れていったので、『中学生日記』の教育議論への影響もほとんど果たせなくなったと言える。

5. おわりに

NHK 社会教育番組『中学生日記』（1972～2011 年度）は、教育の現状、とりわけ受験競争と選別教育等の教育制度の問題を人々に考えさせるために開始された。1980 年代半ばまで、これらの問題の重要性を社会にアピールし、その後の教育改革をめぐる議論の土台を作る役割を果たしていた。ただ、1980 年代半ばの臨教審の設立を境に、『中学生日記』は、教育制度の問題を提起するメディアから、制度改革への深い思考を停止させるメディアに変わってしまった。具体的に、臨教審が提起した教育改革の主張には、制作者側も視聴者側も疑問を持たなかった。彼らの関心は、「受験競争」や「選別教育」といった教育制度の問題から、青少年教育の責任が学校にあるか家庭にあるかに移った。2003 年度以降、「ゆとり教育」の実施及び青少年問題の沈静化を背景に、『中学生日記』は中学生向けの番組として捉えられるようになり、教育議論への影響が一層弱まった。今回の事例は、高度経済成長期後の教育議論におけるメディアの役割変容の一端を表すものだと考えられる。

「ゆとり教育」を方向とする教育改革に関して、教育界または政界の主張の内容およびその変遷に注目する先行研究は多い。だが、「ゆとり教育」が「国民的な合意」と見なされていく過程におけるメディアの役割は、これまで検討されてこなかった。なぜなら、「学歴社会」や「受験競争」を問題視する言説を取り上げることで「ゆとり教育」の必要性を大衆に持たせるというメディアの効果が当然視されるからだと考える。ただ、本稿の調べた結果、メディアが受け手に直接的な役割を果たしたわけではない。1970 年代に『中学生日記』の制作者側は「受験競争」を問題として提起したが、解決策はあえて提示せずに視聴者側に任せた。1980 年代半ば以降「ゆとり教育」の理念が全般的に受け入れられていった背景には、むしろ「学歴社会」や「受験競争」への関心の欠如がある。こういった複雑な状況を描き出した本稿は、高度経済成長期後の教育改革とメディアとの関係を解き明かすための重要な一歩なのである。

一方、十分に扱えなかった点もある。本稿が取り上げた視聴者の語りは、雑誌や新聞に掲載された投書によるものであり、すべての視聴者の声を代表できるかどうかという問題が存在する。特に『中学生日記』の読み方は年齢層によって異なることが考えられる。NHK 名古屋放送局に寄せられた投書や公民館等の社会教育施設での記録を調べ、オーディエンスの多層性を考慮に入れることは、今後の課題としたい。また、本稿は『中学生日記』の送り手と受け手の言説の分析に重点を置いたため、制作者側の意識変容とともに『中学生日記』の内容が具体的にどのように変わったかについても、稿を改めて論じることとしたい。

謝辞

本稿は、「公益信託高橋信三記念放送文化振興基金」による助成金を受けたものである。

注

¹ 広田照幸（2011）『教育議論の作法—教育の日常を懐疑的に読み解く』時事通信出版局 2-7。

² 荻谷剛彦（2002）『教育改革の幻想』ちくま新書 14。

³ 荻谷剛彦（2019）『追いついた近代 消えた近代：戦後日本の自己像と教育』岩波書店。

- 4 NHK 制作局・ドラマ番組部、NHK 放送総局ライツ・アーカイブスセンター編 (2011)『NHK テレビドラマカタログ：ドラマ番組放送記録+カテゴリー小史 1953~2011』NHK 制作局・ドラマ番組部 104。
- 5 1979 年 3 月 29 日の参院通信委員会における NHK 教育局長・堀四志男の発言による。
- 6 市川克美 (1999)「いま、テレビでこんな面白いことができる!——市民とともにつくる」『世界』661 号 136。
- 7 ジョン・フィスク著、山本雄二訳 (1998)『抵抗の快楽——ポピュラーカルチャーの記号論』世界思想社 302-303。
- 8 宮川大介、田代匠子 (2014)「<報告> 放送番組関連資料のアーカイブズ：『中学生日記』資料を事例に」『学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻研究年報』3 号 102-103。
- 米倉律 (2015)「放送関連資料のアーカイブ化とその活用」『ジャーナリズム&メディア：新聞学研究所紀要』8 号 161。
- 9 例えば、黄菊英、太田省一、長谷正人 (2014)『クイズ化するテレビ』青弓社。伊藤守 (1999)「テレビドラマの言説とリアリティ構成」伊藤守、藤田真文編『テレビジョン・ポリフォニー——番組・視聴者分析の試み』世界思想社 86-107。
- 小川有希子 (1999)『3 年 B 組金八先生』の「質的」内容分析と受け手の反応『マス・コミュニケーション研究』54 号 96-112。
- 10 ジョン・フィスク、ジョン・ハートレー、池村六郎訳 (1991)『テレビをく読む』未来社 266。
- 11 蓬萊泰三 (1996)「『中学生日記』と子どもたち」『こどもの本』22 巻 3 号 8。
- 12 1972~1984 年の記事は「朝日新聞縮刷版」というシステムで 6 件、1985~2019 年の記事は「朝日新聞 1985~」というシステムで 209 件ヒットした。
- 13 1972~1989 年の記事は「明治・大正・昭和検索」というシステムで 72 件、1990~2019 年の記事は「平成・令和検索」というシステムで 156 件ヒットした。
- 14 『現代社会学事典』(弘文堂 249)によると、議題設定仮説とは、「マス・コミュニケーションの認知的効果の一種。マス・メディア（とくに報道）である争点やトピックが強調されればされるほど、公衆の側でも同じ争点やトピックがより重要視されるようになる、と仮定する」。本稿は「議題設定」を扱う際にこの解釈を参照している。
- 15 『朝日新聞』1982 年 3 月 5 日付東京夕刊 10 面。
- 16 三浦三生 (1981)『NHK「中学生日記」ドキュメント—中学生たちはいま』講談社 208。
- 17 『朝日新聞』1978 年 3 月 21 日付東京朝刊 3 面。
- 18 八重樫克羅 (1978)「現代の清兵衛たち—「中学生日記」の群像—」『世界』393 号 360。
- 19 邨野継雄 (1979)「虚構の教室が映し出す受験世代の意外な表情」『朝日ジャーナル』21 巻 37 号 91。
- 20 佐藤竜大、有高扶桑 (1977)『中学生日記 5 きょうまでの友』NHK 出版 212。
- 21 高島秀之 (1982)「TV ドラマ「中学生日記」制作ノート」『中央公論』97 巻 6 号 171。
- 22 三浦、前掲書 93。
- 23 荻谷剛彦 (1995)『大衆教育社会のゆくえ』中央公論新社 105-152。
- 24 前掲書 155-187。
- 25 湯浅実 (1982)「教師こそ人間らしさの復権を—百人の子に百様の対応ができる教育は出来ぬか」『月刊教育の森』7 巻 7 号 62-71。
- 26 今泉さちこ・秋山隆志郎 (1981)「『中学生日記』と理想の教師像」『文研月報』31 巻 5 号 59。
- 27 『読売新聞』1974 年 11 月 29 日付朝刊 14 面。『読売新聞』1978 年 6 月 23 日付朝刊 24 面。『読売新聞』1985 年 6 月 22 日付夕刊 9 面。
- 28 『グラフ NHK』1976 年 11 月号 7。
- 29 『読売新聞』1976 年 1 月 18 日付朝刊 20 面。1978 年 3 月 20 日付朝刊 24 面。1979 年 4 月 4 日付朝刊 24 面。1980 年 7 月 24 日付朝刊 24 面。1983 年 6 月 27 日付朝刊 16 面。1983 年 9 月 10 日付朝刊 24 面。
- 30 『読売新聞』1979 年 12 月 1 日付朝刊 24 面。1979 年 12 月 9 日付朝刊 24 面。
- 31 新藤謙 (1981)『権力としての NHK—その不偏不党の思想』三一書房 205-206。

- ³² 広田照幸（2001）「学校像の変容と〈教育問題〉」『教育言説の歴史社会学』名古屋大学出版会 284。
- ³³ 朝日新聞データベース（朝日新聞縮刷版）で「荒れる中学生」を見出しとキーワード検索をすれば、1980年は5件、1981年は4件、1980年と1983年はそれぞれ1件、共計11件がある。
- ³⁴ 高島秀之（1982）「TVドラマ『中学生日記』制作ノート」『中央公論』97巻6号 177。
- ³⁵ 「教育に関する世論調査（要約）」『道徳と教育』26巻2号 39。
- ³⁶ 『データ・バンク』編集委員会（1987）『教師のためのデータ・バンク：児童生徒・学校・世論』啓明研究会 156-161。
- ³⁷ 海部俊樹（1986）「青少年教育への期待」『社会教育』41巻7号 3。
- ³⁸ 『教育改革に関する答申：臨時教育審議会第一次～第四次(最終)答申』大蔵省印刷局、1988年、12-13+278。
- ³⁹ 蓬萊泰三（2000）「30年間で中学生が変容したのは...—NHK『中学生日記』の取材で出会った中学生たち」『子どもの文化』32巻4号 13。
- ⁴⁰ 『朝日新聞』1986年6月11日付東京朝刊3面。
- ⁴¹ 大久保晋作（1994）『何かへんだぞ、中学生』主婦と生活社 34。
- ⁴² 蓬萊、前掲 19。
- ⁴³ 岡本富士太（1996）『「中学生日記」から学んだこと』海風書房 39。
- ⁴⁴ 大久保、前掲書 228。
- ⁴⁵ 『放送教育』1988年7月号 89。
- ⁴⁶ 『読売新聞』1992年6月3日付中部夕刊11面。
- ⁴⁷ 「第五回ペスタロッシー教育賞の受賞者紹介」
https://www.hiroshima-u.ac.jp/ed/pestalozzi/pestalozzi_kako_jusyosya（2017年12月25日閲覧）。
- ⁴⁸ 『放送教育』1991年5月号 26-27。
- ⁴⁹ 『読売新聞』1985年6月3日付朝刊24面。
- ⁵⁰ 『読売新聞』1985年6月23日付朝刊24面。1989年6月6日付朝刊32面。
- ⁵¹ 『読売新聞』1989年4月12日付東京朝刊30面。
- ⁵² 「『中学生日記』ともに見て知る息子の本音」（『朝日新聞』1993年9月30日付東京夕刊18面）；「もっと鋭く『中学生日記』」（『朝日新聞』1995年2月3日付東京夕刊17面）。
- ⁵³ NHK放送文化研究所（2003）『NHK中学生・高校生の生活と意識調査2002』NHK出版
- ⁵⁴ NHK放送文化研究所、前掲書 193。
- ⁵⁵ 「青少年と放送に関する専門家会合」、<https://www.nhk.or.jp/pr/keiei/kaigou/index.htm>（2019年12月11日閲覧）。
- ⁵⁶ 1999年3月23日に行われた参院交通・情報通信委員会でのNHK・海老沢勝二の発言による。
- ⁵⁷ 宇治橋祐之（2019）「教育テレビ60年生涯学習波への広がりインターネット展開」『放送研究と調査』69巻1号 2-17。
- ⁵⁸ 2004年に発行された『NHK年鑑』による。
- ⁵⁹ 『朝日新聞』2003年7月25日付東京夕刊6面。
- ⁶⁰ 前掲記事。
- ⁶¹ 前掲記事。
- ⁶² “International Emmy Awards”,
http://www6.nhk.or.jp/awards/english/award/program.html?i=20130215_01（2017年12月10日閲覧）。
- ⁶³ 『毎日新聞』2012年3月13日付中部夕刊1面。
- ⁶⁴ 「50年間放送されてきたNHKの長寿番組『中学生日記』が終了」、
<https://srad.jp/story/12/01/19/102217/>（2019年9月25日閲覧）。

（教育文化学コース 博士後期課程1回生）

（受稿2020年8月29日、改稿2020年11月10日、受理2020年12月7日）

教育議論における NHK『中学生日記』の役割

—制作者側・視聴者側の語りを中心に—

王 令薇

NHK『中学生日記』は1972年から2012年にかけて毎週放送されたNHK名古屋放送局制作の社会教育番組である。本稿は、その制作者側・視聴者側の語りを主な分析対象に据え、「ゆとり教育」が「国民的な合意」と見なされていくプロセスの一端を示した。1970年代から1980年代半ばまでの『中学生日記』は、制作者側の構想通りに、「受験戦争」と「選別教育」といった教育制度の問題を人々に提起し、それぞれの意見を述べさせる役割を果たしていた。1980年代半ばにおける臨時教育審議会の設立を境に、教育制度の問題への番組制作者側・視聴者側の関心は低くなり、学校と家庭が青少年の教育において果たすべき責任は議論の争点となってきた。2003年度以降、「ゆとり教育」の本格的実施と青少年問題の沈静化を背景に、『中学生日記』は制作者側によって中学生向けの番組として捉えられていくと同時に、教育議論への影響が小さくなってしまった。

The Role of NHK *Chugakusei Nikki* in Discussion on Educational Issues: Focus on Its Producers and Readers' Narratives

WANG Lingwei

NHK *Chugakusei Nikki* (*Junior High School Diaries*) was a weekly educational TV program, which was produced by NHK Nagoya Broadcasting Station and aired on NHK nationally from 1972 to 2012. This paper, focusing on its producers and readers' narratives, indicated a part of the process in which Yutori education came to be regarded as the "national consensus" in Japan. From the 1970s to the mid-1980s, *Chugakusei Nikki* played a role in highlighting problems in the Japanese educational system, such as fiercely competitive entrance examinations, and allowed people to exchange their opinions about these issues, as the producers envisioned. After the establishment of the National Council on Educational Reform in the mid-1980s, producers and readers' interest in the educational system faded away. They began to pay attention to whether school or parents are responsible for youth problems. Since 2003, against the backdrop of the implementation of Yutori education and calming down of juvenile problems, *Chugakusei Nikki* has come to be perceived as a program specially for teenagers, and the program has lost its impact on discussions over educational reform.

キーワード：教育議論、日本放送協会（NHK）、ゆとり教育

Keywords: Discussion on educational issues, Japan Broadcasting Corporation (NHK), Yutori education